

メタファーという壁を乗り越えられるか

——デイヴィドソンの真理条件意味論とメタファー——

青山晋也

はじめに

本論の目的は、(1) Davidson が提案する真理論的意味論においてメタファーがどのように扱われているのかを前期と後期という形で二つに分けて取り上げ、(2) 後期の立場を前期の立場と整合的なものとして理解できる解釈を提案すること、である。

1. 前期のメタファーに対する理解

1 節では Davidson(1978)で示されたメタファーの理解を説明する。この論文での Davidson の立場は、メタファーが意味するのは文字通りの意味だけ(Davidson, 1978, p. 245)、というものである。またその論文で取り上げられる論敵の立場の中で代表的なのが、メタファーは文字通りの意味以外に、メタフォリカルな意味（特別な意味）を同時に持つと考える立場である。以下では両者の共通点、相違点を説明しよう。

まず両者の共通点から述べることにしよう。論敵とされる立場はメタファーは何を成し遂げているのか、すなわちメタファーの効果という点では Davidson と対立していない。両者は共に次の点で一致している。メタファーによって、私たちはしばしば以前には気付かなかった事物のいろいろな側面に気付く。メタファーはとりわけ世界の事物のあいだの驚くべき類似性に気付かせてくれる。両者はこの点では一致している。

では相違点はどこか。両者の相違点は、メタファーがそうした効果をどのようにして成し遂げるのかという点にある。論敵の立場では、そうした効果は意味論的なレベルで説明される。つまり、文字通りの意味以外に、メタフォリカルな意味を導入し、それが以前は気付かなかったような世界の事物の驚くべき側面に気付かせると考える。それゆえ、この立場ではメタフォリカルな真理・事実というべきものが存在するのである。例えば「新田はハヤブサだ」がメタファーだとして、この文が「新田は動きが早い」というメタフォリカルな意味を持つとしよう（こうした意味は、私たちがメタファーをパラフレーズすることで得るとされる）。するとこのとき、私たちは「新田はハヤブサだ」というメタファーによって「新田は動きが早い」という意味を理解し、それによって二つの事物の類似性に気付くことになる（言い換えれば、メタフォリカルな真理・事実を知る）。こうした立場では、メタファーが述べる二つの事物間の類似性に気付くために必要なのはメタフォリカルな意

味を理解することであり、その類似性に気付くために私たちは世界がどのようなになっているのかを確認するといった作業は必要ない。

ではDavidsonはどう考えるのか。「メタファーはもっぱら使用の領域に属す」(ibid., p. 247) と言うように、Davidsonは意味論のレベルではなく、語用論的レベルでメタファーを扱う。Davidsonによれば、メタファーを特徴づけるものは意味ではなく使用であり、その意味では、メタファーは主張すること、暗示すること、嘘をつくこと、約束すること、批判することに似ている(ibid., p. 259)。例えば、ある人Aが知り合いのBについて「彼女は魔女だ」と嘘をついて、他の知り合いのCにBが魔女であることを信じさせようとしているとしよう。このとき、Aはその発話を嘘をつくために使用している。これと同じように、Aは同じ発話をCにBと魔女の類似性を気付かせるために使用することもできるだろう。Davidsonによれば、そのように使用されたものがメタファーなのである。

このような立場では、文字通りの意味だけを使い、メタファーがどのようにして私たちを世界の事物の驚くべき類似性に向けさせるのかを説明しなければならない。Davidsonはこれについて次のように説明する。まずメタファーが現れる文は通常の意味で真か偽である。というのも、メタファーにおける語が特別な意味を持たないのなら、文も特別な真理というものを持たないからである(ibid., p. 257)。さてそうになると、当然メタフォリカルに使われた文が通常の意味で真か偽であるなら、通常その文は偽である。しかし、ここで重要なことはメタファーとして使われた文が実際には偽であることではなく、偽であると見なされることである。なぜなら、一般に、文が偽であると見なされたとき、それをメタファーとして受け入れ、隠された含意を探し始めるからである(ibid., p. 258)。メタフォリカルな文が持つおかしさや矛盾により、その文がメタファーとして使われていると受け取るよう、私たちは促されるのである(ibid., p. 258)。このように、Davidsonによれば、私たちはメタファーによってある事実を気付くのだが、それはメタファーがその事実を表現することによってではないのである。

しかし、このような説明だけでは、単にメタファーは文字通りの意味しか持たないという立場でもメタファーの効果が起こるプロセスを説明できるということではしかない。次にすべきことは論敵の立場を直接攻撃することだろう。そこでDavidsonはメタファーをパラフレーズするときに私たちは何をしているのかに注目する。まずDavidsonの立場では、メタファーは文字通りの意味以上のことを述べていないので、パラフレーズすべき意味のようなものは存在しない。そのため、メタファーはパラフレーズできないと言われる。

これに対して、論敵の立場ではメタファーをパラフレーズするのはメタフォリカルな意味を与えるためである。Davidsonによれば、こうした考えの背景には次のようなテーゼが

存在する。すなわち、「メタファーと結びついているものは書き手が伝えたいと願っている特定の認知内容であり、それはもし解釈者がそのメッセージを受け取ろうとするならば、把握しなければならない認知内容である、というテーゼ」(ibid., p. 262)である。Davidsonによれば、こうしたテーゼは、そうした認知内容と称されるものを意味と呼ぼうと呼ぶまいと、メタファーについての完全な説明としては誤りである。これを示すために二つの論点が挙げられる。

一つ目は「メタファーが私たちの注意を要求するものには限度はない」(ibid., p. 263)ことである。メタファーが気付かせてくれるものが有限の範囲内で収まるとは限らないのだから、パラフレーズがいつまでたっても終わらないといったこともありうる。その場合、メタファーは無限の意味を持つことになる。Davidsonによれば、私たちがメタファーによって喚起されるものは、イメージや感情といったものであり、言葉で十全に扱えるものではない。つまり、「言葉は画像と交換するには適さない硬貨なのである」(ibid., p. 263)。

二つ目はそもそも「私たちが気付かされることの多くは性格上命題的なものではない」(ibid., p. 263)ことである。DavidsonはWittgensteinが取り上げたアヒルにもウサギにも見える絵を用いて、ある見方に関わる「として見る seeing as」と、ある事実(命題)に関わる「ということを見る seeing that」の違いを説明する。ここでは、私があなたにその絵について説明する場面を考えよう。私が「それはアヒルだ」と言うと、あなたはその絵をアヒルの絵として見始める。また私が「それはウサギだ」と言えば、あなたはその絵をウサギとして見始める。こうすることで、おそらくあなたはその絵がアヒルとしてもウサギとしても見ることに気付く。しかし、私の発言(命題)のどちらも私があなたに見るよう促したものの、つまりその絵を表わしていない。Davidsonによれば、メタファーによって私たちは、その絵をアヒルやウサギ「として見る」のであって、その絵がウサギ、あるいはアヒルである「ということを見る」わけではないのである(ibid., p. 263)。つまり、私たちはメタファーによって、ある事柄をある仕方で見えるようになるのであって、ある事実を見出すわけではないのである。

このことを踏まえて、Davidsonは次のように言う。メタファーによって私たちはあるものを他のものとして見るようになるが、それは、そうした洞察を呼び起こしたり、誘発したりするある文字通りの言明によってなされる(ibid., p. 263)(今の例でいえば、文字通りの言明とは「それはウサギだ」や「それはアヒルだ」のこと)。しかし、「たいていの場合、メタファーが呼び起こしたり引き起こしたりするものがある真理や事実の認知であるとは限らないし、まったくそうではないことさえある」(ibid., p. 263)。それゆえ、Davidsonによれば、メタファーによって私たちが認識するものに対してパラフレーズと称して文字通り

の意味を持つ表現（それは当然真理や事実を語るものである）を与え、その表現の意味することをメタファーが内容として持つと考えるのは間違いなのである(ibid., p. 263)。

これまでのところをまとめておこう。

1. メタファーは文字通りの意味しか持たない。それ以外にメタフォリカルな意味といったものは持たない。
2. パラフレーズする必要があるような意味を持たないので、パラフレーズできない。
3. メタファーはもっぱら使用の領域に属す。
4. メタファーは文字通りの意味しか持たないので、ほとんどの場合メタファーは偽。
5. ある文が偽であり、文字通りに理解したのではおかしい意味になることによって、私たちはそれをメタファーとして受け入れ、隠された含意を探し始める。
6. メタファーと結びついているものは書き手が伝えたいと願っている特定の認知内容であり、それはもし解釈者がそのメッセージを受け取ろうとするならば、把握しなければならない認知内容である、というテーゼは間違っている。
7. メタファーが私たちの注意を要求するものには限度はない。
8. 私たちがメタファーにより気付かされることの多くは性格上命題的なものではない。

2. 後期のメタファーに対する理解

2.1 事前理論 prior theory と当座理論 passing theory

後期のメタファーの理解と解釈プロセスについて述べるにはすこし準備が必要である。まずは「事前理論」と「当座理論」について説明しよう。

私たちは誰かと会話しているとき、どのような仕方でもどのような内容の発話を組み立てるのかに対して、何らかの方針（解釈の仕方）に従っている。これはたとえ、道で見知らぬ外国人に会ったときですらそうである。その人が何語を話すかわからなくても、例えば英語でその人に話しかけたなら、私たちは自分たちが知っている英語の発話の解釈の仕方に従って、会話を組み立てていることになる。このように、私たち（話者）は発話する前に解釈者（聞き手）の解釈の仕方を推測し、その上で発話するのだが、こうした話者の推測する解釈者の解釈の仕方を描くものが話者の事前理論である。これに対して、話者の当座理論とは、発話する前に話者が解釈者に「こう解釈してもらいたい」と意図している解釈の仕方を描くものである。もちろん、普通は話者の事前理論と当座理論はあまり大差のないものとなるだろう。二つの理論が異なる例としては、話者が皮肉やメタファーを言ったときである。

解釈者の側でも、何の方針も持たず会話の相手の発話に臨むわけではない。家族やよく

知っている友だちなら、あまり考えなくてもその各人に対して特定の解釈の仕方を準備して臨むだろう。先ほどの外国人の例ならば、相手が英語を話すかどうか知らなくても、その人の最初の発話をしたとき、その発話を英語で解釈しようとするならば、そのとき私たちは当然英語の解釈の仕方に従っているわけだ。このように、話者の発話に際して「こう解釈すればいいだろう」というように解釈者が話者の発話に対して準備している解釈の仕方を描くものが解釈者の事前理論である。これに対して解釈者の当座理論とは、話者の発話を聞いて、解釈者が話者の意図したもの（話者の当座理論が描く解釈の仕方）に沿うと自分が想定する形で実際に発話を解釈する仕方を描くものである。

2.2 最初の意味 first meaning

後期において事前理論と当座理論とともに重要となるのが「最初の意味」である。これについて二つの理論と絡めて説明しよう。Davidson は（言語）行為が複数の意図をもって行われるとき、それらの意図のあいだには順番があり、それらは、行為者から見られた手段と結果の関係をもとに作られた連鎖を構成する(Davidson, 1993, p. 173)、と述べ、そのあと次のように説明する。

ある人は「あれはエミューだ」という音声を作るために口と舌を動かし、それはエミューが顕現している *an emu is salient* ときかつそのときに限り真であるものとして聞き手に解釈されるであろう言葉を話すためであり、それは顕現している対象がエミューだということを伝えるためであり、それはエミューの特定の仕方を聞き手に教えるためであり、それは…。この連なりにおいて、語が意味すること、ないし語が意図されていることを意味することに関わる最初の意図が、解釈者によってある特定の意味が割り当てられるであろう語を話すという〔話者の〕意図である。私はこれを**最初の意味**と呼ぶ。それは大ざっぱに言って、時として文字通りの意味と呼ばれるものに対応する。(ibid., p. 173, 強調 Davidson, [] 内筆者)

引用では話者の最初の意味だけが述べられているので、以下では話者と解釈者の最初の意味を分けて説明しよう。

まず話者にとっての最初の意味は、引用にある通り、話者の事前理論が描く解釈の仕方によって与えられる意味であり、この場合は「あれはエミューだ」ということになる。このとき、もし当座理論のレベルでも、解釈者に「アレハエミューダ」⁽¹⁾を「あれはエミューだ」という仕方で解釈することを話者が望んでいるなら、事前理論と当座理論が描く解

釈の仕方にほとんど違いはないことになる。次に解釈者の最初の意味とは、解釈者の事前理論が描く解釈の仕方によって与えられる意味のことである。もし解釈者が話者の発話に先立って「アレハエミューダ」という音声の発話に対して「あれはエミューだ」という解釈の仕方を準備していたとしたら、解釈者にとっての最初の意味は「あれはエミューだ」ということになる。このとき、当座理論のレベルでも、話者の発話を聞いて、解釈者が話者の意図したもの（話者の当座理論が描く解釈の仕方、つまり「アレハエミューダ」という発話を「あれはエミューだ」として解釈する仕方）に沿うと自分が想定する発話の解釈の仕方も「あれはエミューだ」だとしたら、解釈者の事前理論と当座理論が描く解釈の仕方にほとんど違いはないことになる。

ここで注意したいのは、なぜ最初の意味を文字通りの意味と区別するのかということである。確かに今の描き方では、特に「最初の意味」という用語を導入しなくてもいいように思える。しかし、後期の意味論は、事前理論と当座理論ともに会話の相手によって変化し、また発話ごとに更新されていくという性格を持っている。それゆえ、最初の意味が文字通りの意味でないということはいくらでも起こりうる。例えば、A と B が何らかの理由で二人の友人である C を「エミュー」と呼ぶことにしたとしよう。つまり、二人のあいだでは、ある特定の場面で使えば「エミュー」は C を指示するものとして解釈されることになる。このような状況で、C が二人のところに歩いてきたとき、A が「エミューが来た」という発話をしたとしよう。このとき、話者 A の最初の意味は「C が来た」であり、また解釈者 B の最初の意味も「C が来た」となるだろう。なぜなら、この場面では二人のあいだでは了解があるので、A はすでに事前理論のレベルにおいて、B は「エミューが来た」という発話を「C が来た」と解釈すると考えており、B も A の発話に際して A の「エミューが来た」という発話に対して、「C が来た」という解釈を与える解釈の仕方を準備しているだろうからである。当然、ここでの最初の意味は文字通りの意味ではない。

さて、先ほどの例と同じように、この場合にも話者と解釈者の事前理論と当座理論が描く解釈の仕方には違いがないことになるのだが、これら二つの例とは異なって、解釈者の事前理論と当座理論が描く解釈の仕方が異なるものの代表がメタファーである。以下では、後期におけるメタファーの解釈プロセスについて説明するが、その前に「当座理論の一致」という考え方について説明しよう。

今述べた二つの異なる例（話者と解釈者の事前理論と当座理論が描く解釈の仕方に違いがないものと異なるもの）において、結局のところ話者と解釈者のあいだでコミュニケーションが成立するためには両者の当座理論が一致していた。このように、後期の Davidson においては、「コミュニケーションが成功するために共有されなければならないのは当座理

論である。というのも、当座理論は解釈者が実際に発話を解釈するために使うものであり、またそれは話者が解釈者に使うよう意図している理論であるからである。聞き手と話者の当座理論が一致する場合にのみ、理解が成立する」(Davidson, 1986, p. 102)とされる。

2.3 メタファーの解釈プロセス

ここでは Davidson(1993)において述べられている私たちのメタファーの理解を事前理論、当座理論、最初の意味という道具立てを使って描き出してみよう。具体的には文 S「ときどき、熱すぎるほどに天国の目は輝く sometimes too hot the eye of heaven shines」を取り上げ、この文を私たちが、太陽はときどきまぶしすぎるくらいに輝く the sun sometimes shines too brightly を意味するものとして解釈するプロセスを描くことにする(Davidson, 1993, p. 173)。

まず上の文における「天国の目」の最初の意味に関する Davidson の説明に注目しよう。私たちは文 S を読んだとき、「天国の目」の最初の意味が一つの、そして唯一の天国の目を指示することを意図しているとわかる。Davidson によれば、「私たちにこのことがわかるのは、次の理由による。すなわち、Shakespeare は、読み手に彼が太陽を意味したことを理解するよう促すために、一つのそして唯一の天国の目（もしそのようなものが存在するとしたらだが）を指示するものとして読み手に見なされるであろう言葉を使うことを意図した（と私たちが想定する）からである」(ibid., p. 173)。

このプロセスを Shakespeare の側から描き出すと次のようになる。Shakespeare の事前理論には次のような T 文（真理条件意味論の定理）が含まれている。

「ときどき、熱すぎるほどに天国の目は輝く」が真であるのは、ときどき、熱すぎるほどに天国の目は輝くときまたそのときに限る

なぜ Shakespeare の事前理論がこのようなことになるかというと、Shakespeare がまず読者は S における「天国の目」を天国の目を意味するもの（したがって、この場合には「天国の目」の最初の意味を文字通りの意味）として解釈するだろうと予測してこの文を書いたと考えられるからである。

次に、上の Davidson の説明に従えば、Shakespeare の当座理論は次のような T 文を含んでいる。

「ときどき、熱すぎるほどに天国の目は輝く」が真であるのは、太陽はときどきまぶしすぎるくらいに輝くときまたそのときに限る

話者（書き手）の当座理論は、解釈者に「こう解釈してもらいたい」という解釈の仕方を描くものであり、この場合文 S における「天国の目」を「太陽」として解釈してもらいたいということになる。

今度は解釈者である私たちの側から先ほどのプロセスを描くことにしよう。まず事前理論は次のような T 文を含むことになる。

「ときどき、熱すぎるほどに天国の目は輝く」が真であるのは、ときどき、熱すぎるほどに天国の目は輝くときまたそのときに限る

これは私たちが英語の書き手なら通常、文 S の「天国の目」を文字通り「天国の目」を意味するものとして使うだろうと事前に考えているからである。（したがって、もし私たちが Shakespeare は「天国の目」を「太陽」を意味するものとして使うということを知っていたなら、状況は変わってくる。）

次に（コミュニケーションの成立における）私たち解釈者の当座理論は次のものになる。

「ときどき、熱すぎるほどに天国の目は輝く」が真であるのは、太陽はときどきまぶしすぎるくらいに輝くときまたそのときに限る

もちろんいきなりこうした当座理論にたどり着けるかどうかはわからない。とにかく（どのくらいの解釈を重ねようとも）私たちの解釈の仕方が事前理論からこのような T 文を与える当座理論への移行によって描かれることになるなら、当座理論が一致しコミュニケーションが成功したことになる。

2.4 当座理論の一致と理解の漸近線

今の説明にあったように、解釈者はコミュニケーションを成功させるために話者と当座理論を一致させなければならなかった。こうした移行がどのような仕方で行われるのかは、意味論においてメタファーの理解を描くという問題とは分けて考えることのできる別の問題であるが、この問題について Davidson は次のように述べている。

言語能力とは時あるごとに当座理論を一致させる能力であると私たちは言うかもしれない——これが私の提案したことであり、これ以上の提案はない。しかしもし

本当にこう言うのであるなら、そのとき私たちは、言語に関する通常概念を捨て去っただけでなく、言語を知ることと一般に世界について精通していることとのあいだの境界線を消し去ったということに気づくだろう。(Davidson, 1986, p. 107)

つまり、解釈者が事前理論から話者の当座理論と一致するような当座理論へと移行できるかどうか、あるいはどのくらいの解釈の果てにそうした当座理論へ到達できるかは、解釈者がどれだけ世界について精通しているかに左右される問題なのである。例として、A が B に向かって、共通の友人である C について「C はエミューだ」をメタファーとして解釈されるべきものとして発話したとしてみよう。このとき、Davidson の考えでは、B が当座理論において A と一致できるかどうか、あるいは B の解釈プロセスが当座理論を話者が意図した解釈の仕方へと修正していくことで「合意と理解の漸近線」(ibid., p. 101)を描くものになるどうかは、例えば B が C についてどれだけ知っているかや、B が A の表現の好みをどれだけ知っているかといったことに依存する。A の発話「C はエミューだ」に関して A と当座理論で一致するために、B の世界の精通度がまったく不十分であった場合には、「合意と理解の漸近線」は描かれまいだろう。また B の世界の精通度がそれなりにあった場合、何回か解釈を重ねていくことで B が A の当座理論へ近づいていくとするなら、まさに「合意と理解の漸近線」は描かれることになるだろう。

このように解釈プロセスが捉えられると、解釈プロセスにおいて、複数の意味を持つと考えられるようなメタファーや他の多くの表現と、それと対比されるような通常の表現のあいだの違いがあまりなくなる。すべての発話は、解釈という発話を理解するプロセスに位置づけられ、そのプロセスにおいてすべての発話は原理的に、当座理論の一致に到るまでに段階的に（つまり同時に複数の解釈が与えられるという意味ではなく、一致へと至る解釈プロセスの各解釈段階において）複数の解釈を与えられる。当座理論の一致に到るまでにある発話に対し、解釈プロセスにおいてどれほどの解釈が与えられるのかは解釈者（がどれだけ世界について知っているのか）に依存する。とにかく私たちは、発話に対して、手持ちの情報・知識から当座理論の一致を目指して、解釈を繰り返していく。その解釈プロセスにおいて、どれくらいの解釈を重ねることで一致へと至るかはわからない。一回で（当座理論が一致したと思い）解釈が終わるかもしれないし、いつまでたっても解釈が終わらないかもしれない。発話の解釈において私たちが置かれているこうした状況は、別にメタファーのような表現に限ったことではないのである。

3. メタファーについての Davidson の理解を対比する

ここでは、まず前期と後期のメタファーに関する理解と対比し、後期において変更された点を確認する。そのあと、対立するように見える点を指摘し、前期のメタファーに関する洞察が後期のメタファーの説明と整合性を保つような解釈を示すことにする。それでは先にまとめた八つの点それぞれについて解釈を加えていく。

1. メタファーは文字通りの意味しか持たない。それ以外にメタフォリカルな意味といったものは持たない。

後期では話者と解釈者に分けて考えなければならない。まず話者にとって、メタファーとは事前理論では解釈者によって基本的には文字通りの意味(最初の意味)として解釈され、当座理論では解釈者に自分の意図した意味で解釈されるであろうものとして発話される表現である。したがってこの場合、メタファーは最初の意味(文字通りの意味)以外に、話者が意図した意味を持つので、基本的に段階的に二つの意味が与えられるべき表現として発話されることになる。次に、解釈者にとっては、メタファーは基本的に事前理論では文字通りの意味として解釈することになるだろうが、その後当座理論の一致へ至る解釈プロセスにおいて段階的にどれだけの解釈が与えられるのかはわからない。話者が意図した意味を理解した(当座理論が一致した)と解釈者が思うまで解釈は続いていく。

2. パラフレーズする必要があるような意味を持たないので、パラフレーズできない。

後期では、メタファーをパラフレーズするとは、解釈者が「合意と理解の漸近線」を目指して事前理論から話者と一致する当座理論へと移行や当座理論レベルでの修正として捉えることができるだろう。

3. メタファーはもっぱら使用の領域に属す。

後期ではメタファーの解釈プロセスは、(他の表現と同じように)その解釈ごとに(最初の意味から)得られた情報などを基にして動的に意味論を組み替えていくプロセスと、組み替えられた意味論から解釈を与えるプロセスという、いわば使用に属すプロセスと意味論に属すプロセスが合わさったものから成り立っている。

4. メタファーは文字通りの意味しか持たないので、ほとんどの場合メタファーは偽。

後期ではメタファーが偽であるように思われるのは事前理論のレベルにおいてである。解釈者は事前理論におけるメタファーの解釈が文字通りには偽であり、解釈がおかしいことからその解釈は話者の意図した解釈ではないと判断し、解釈を重ねていく。そして、メタ

ファーが当座理論の一致によって解釈者に理解されたとき、(話者が意図した解釈が真なものであるなら) メタファーは真な表現となる。

5. ある文が偽であり、文字通りに理解したのではおかしい意味になることによって、私たちはそれをメタファーとして受け入れ、隠された含意を探し始める。

後期ではこれは事前理論に関して言われる意味において、正しい。

6. メタファーと結びついているものは書き手が伝えたいと願っている特定の認知内容であり、それはもし解釈者がそのメッセージを受け取ろうとするならば、把握しなければならぬ認知内容である、というテーゼは間違っている。

後期ではこのテーゼは「書き手が伝えたいと願っている特定の認知内容」が話者の意図した解釈の仕方として理解されるのなら正しい。その場合、書き手の伝えたいメッセージを解釈者が受け取るとは、つまり当座理論の一致という事態を表していると理解できる。

ここまでは後期の理解でも簡単に説明できるのであるが、問題は次の二つである。

7. メタファーが私たちの注意を要求するものには限度はない。

こうした指摘はメタファーを解釈する場面を考えてみればある程度説得力を持つ。というのも、私たちは無限とは言わないまでもある程度複数のものに対して注意を要求されており、あるメタファーに対して数多くのいろいろな解釈を考えることができるからである。したがって、こうした指摘はメタファーの解釈を説明する理論にぜひとも取り込んでおきたい点である。しかし後期において、話者は「このように解釈されたい」という意図を持って発話行為を行う。それゆえメタファーは、前期では無数の解釈を要求しているもののように言われているが、対照的に後期では話者の意図した解釈という一つの解釈を要求しているもののように思われ、これらは整合的ではない。前期の指摘をうまく取り込む形で後期の解釈の枠組みを維持したいところである。

8. 私たちがメタファーによって気付かされることの多くは性格上命題的ではない。

これは Davidson が前期において力説していた論点であるが、私たちが言語的コミュニケーションによってメタファーが何を言っているのか(話者の意図した解釈)を理解するのなら、それは(少なくとも Davidson の枠組みでは)命題的なものでなければならないだろう。したがって、これら7、8をうまく説明しなければならない。

これに答えるために次のように考えてみよう。メタファーが注意を要求し、かつ命題的

でないようなものは事前理論によって最初の意味を得たあと（ないし当座理論を修正中）に私たちが得るものであると考えるのである。そうしたものはイメージや感情といったものであるかもしれないが、（新しい）当座理論を作るための情報・ヒントになるようなものである。つまり、発話解釈によって得られる7、8が述べているようなものを使い意味論を動的に修正しつつ、解釈者は当座理論の一致を目指していると考えるのである。もちろん最初は、解釈者において複数の解釈が乱立しているような状態に置かれることもあるかもしれないが、それは当座理論の一致へと至る途上にあると理解できる。それでも、もしメタファーの理解が成功するのであれば、解釈者はただ一つの理解（もちろん話者の意図が一つであるならばだが）を選び出していることになるのである。

おわりに——真理条件意味論はメタファーという壁を乗り越えたのか——

Davidson の枠組みでは当座理論のレベルで話者と解釈者の解釈の仕方（これは命題によって表現される）が一致することが、言語的コミュニケーションの成功を意味する。つまり、メタファーを含む言語コミュニケーションの成功とは、話者が意図した解釈（命題的な真理条件を持つ発話の解釈）をもとに発話し、解釈者が当座理論の一致において意図された解釈を発話に与えることである。

話者は意図する解釈とともに発話し、解釈者はその意図された解釈に到るまで解釈を重ねるというプロセスにおいて、発話の解釈が意味論によって与えられるプロセスは、いわば意味論が決まれば発話の解釈も決まるので静的なものである。これに対して、更新によって異なる解釈を与える意味論へと移行していくプロセスはさまざまな情報・知識を駆使してリアルタイムで進んでいく動的なものである。

こうした Davidson の発話の解釈プロセスの枠組みを受け入れるなら、真理条件意味論はメタファーという壁を乗り越えたことになるだろう。

註

(1) Davidson にとって解釈される前の発話は単なる音声にすぎない。それを強調したいときにはこのようにカタカナを使うことにする。

文献

Davidson, D. (2001). *Inquiries into Truth and Interpretation*, Oxford: Clarendon Press. (1991, 野本和幸他訳, 『真理と解釈』, 勁草書房.)

—— (2005). *Truth, Language and History*, Oxford: Clarendon Press.

—— (1978). 'What Metaphor Means,' in Davidson (2001), (pp. 245-64).

—— (1986). 'Nice Derangement of Epitaphs,' in Davidson (2005), (pp. 89-107).

—— (1993). 'Locating Literary Language,' in Davidson (2005), (pp. 167-181).

〔京都大学大学院修士課程・哲学〕